



① 「手下」はめいれいされたとおりにする人のこと。② 「女」の音読みには「ジョ」と「ニョ」がある。「女房」のようにとくべつに「ニョウ」とよむこともある。③ 「雨上がり」は「雨がやんだあと」という意味である。④ 「人」の音読みには「ジン」と「ニン」が、「生」の音読みには「セイ」と「ショウ」がある。⑤ 「日」の音読みには「ジツ」と「ニチ」がある。

② 1 「ぼく」がいま何をしようとしているか、ということである。はじめに通して読んだときにわかっておきたい。四行あとに「パン子ちゃんを救わなければ」とあるが、うまく空らんにあてはまらないので、同じような意味のところをさがす。

2 すぐうしろに「ああ、なんておいしそうなにおい」と書かれている。「よだれが出る」は、ひどくほしがるようすをあらわすことばである。

3・4 ぼくは③なので、「そのまま通り過ぎるのは」むずかしいといっている文である。すぐまえの文で、竹やタケノコのことを「ああ、なんておいしそうなにおい」といっている。また、すぐうしろには「だめだだめだ、パン子ちゃんを救わなければ。ぼくはゆうわくに負けず……」とある。まとめると、ぼくは③だから、タケノコを食べたいのだけれど、がまんしてパン子ちゃんを救いにいくといっているのである。

5 「もぐもぐ」は口をちゃんと開けないでものを食べたりしゃべったりするようす。「もこもこ」はふくらんでいるようすややわらかいものがつぎつぎにあらわれてくるようす。「しゃきしゃき」は食べ物をかんだときの歯ごたえがいいようすをあらわす。これにたいして「じゃきじゃき」は砂や卵のからをかんでいるときのようないやなかんじをあらわす。

6 「じっくり味わっているぼくの耳もとで、うるさいシカとカピバラが文句をいう」という一文である。ここで「ぼく」が「味わっている」のは、「シカとカピバラから」「うばい取った」「竹」である。

③ 「○○り」のかたちでものごとのようすをあらわすことばはたくさんある。文章の中で見かけることがあったら、どんなようすか思い出しておきたい。

① 「ゆったり」は、ゆとりがあって、のんびりおちついていようす。

②・⑤ 「はっきり」と「くっきり」は少しにているが、「くっきり」は見たかんじにつかうことばである。

③ 「うっとり」はうつくしいものを見たりしてよいきもちになっているようす。

④ 「きっぱり」は言ったりしたりすることがはっきりしていて、かんちがいされることがないようす。

⑥ 「あっさり」は色や味、性格などがしつこくないようす。「こってりした味」というと「あっさりした味」のほぼ反対の意味になる。

④ 1 「四季」は「春」「夏」「秋」「冬」の四つの季節のことである。季節ごとに、その季節ならではの花や動物、行事などがあるので、知っておきたい。「あじさい」は梅雨のころ、つまり夏の花になる。春の花にはほかに「うめ」「もも」「たんぽぽ」「なのはな」などがある。夏の花にはほかに、「ばら」「ぼたん」「ゆり」などがある。秋の花にはほかに「コスモス」「ききょう」「おみなえし」などがある。冬の花は少ないが「さざんか」「すいせん」などがある。

2 ③のほうがわかりやすい。「まえの③のときにくきのためにためておいた水分」ということは、水のあるときなので「雨期」が入るだろう。だとすると、②は「かんそう期」でないとおかしい。

3 「そして」は、順に何かが起こったり何かをしたりするときにつかわれることばである。「しかし」は、それまでと反対のこと、意外なことをつづけて書くときにつかうことばである。「だから」は、そのぎやくで、とうぜんのないようがつづくときにつかわれる。「ただし」は「しかし」とにているが、あとからじょうけんなどをつけくわえるときにつかわれる。

4 アについて。「サボテンのはえているさばくには四季がない」というのは正しいし、「一年じゅうサボテンの花がさいている」もまちがいでないが、「四季がないため」「一年じゅう花がさくわけではない。イについて。「日がかげつてくると、(花は)とじてしま」うのだから、夜には「花をとじている」はずである。ウについて。「土地によってかんそう期がちがう」も「サボテンはすべてあざやかな花をさかせる」も正しいが、「かんそう期がちがう」から「あざやかな花」がさくわけではない。